

支倉 常長

— 粘り強く役目を果たす —

慶長十八（一六一三）年十月二十八日、石巻の南にある牡鹿半島の月浦から一せきの船が出航しようとしていました。サン・ファン・パウティスタ号という大きな洋式の帆船です。これからこの船に乗って支倉常長は、太平洋を渡り、遠くメキシコやスペイン、ローマへと旅立つのです。当時、日本人が太平洋を渡るのは、命がけの大冒険でした。

浜では大きな声があがり、船の乗組員たちも手すりから身を乗り出して、激しく手を振りました。常長は、主君伊達政宗から大切な手紙を預かっていました。



宮城県慶長使節船ミュージアム内に係留されているサン・ファン・パウティスタ号

わたしたちは、メキシコやスペインのみなさんと仲良くなり、自由に船で行き来できるようになりたいと思っています。また、キリスト教のすばらしい教えを、もっと深く学びたいと考えています。くわしくは、わたしの使いとして支倉常長を送りますので、交渉してください。

奥州仙台藩主 伊達政宗

手紙は、スペイン国王とローマ法王にあてたものでした。

今回の旅の案内役であるスペイン人の神父ルイス・ソテロは、常長のとなりに並び、不安げに声をかけました。「常長殿、政宗様はスペインやメキシコの進んだ文化を、仙台に広めたいとお考えですね。でも、今、日本は、スペインとの交渉に必要なキリスト教を禁じようとしています。とても難しい交渉になるでしょうね。」

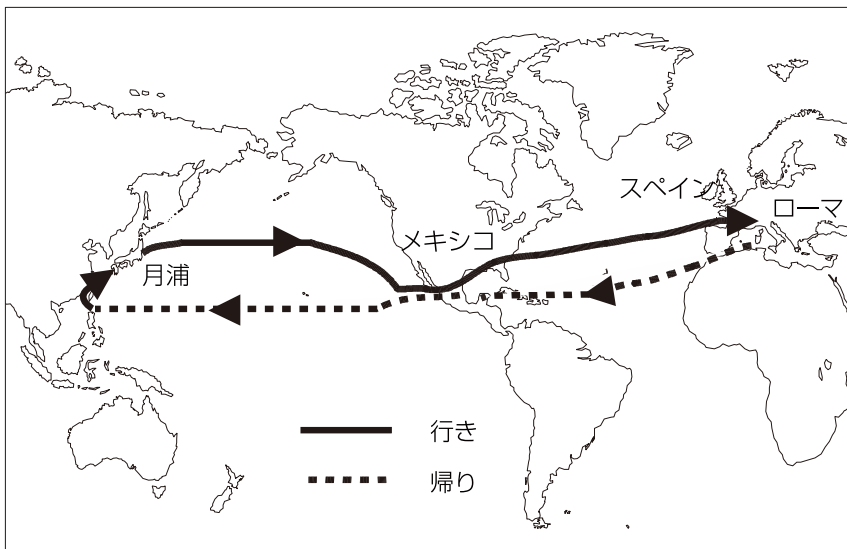
帆船：
帆をかけた船。

「うむ。外国の人々は、簡単にわれわれを受け入れてはくれないだろう。神父、仲立ちをよろしくたのむぞ。」
常長は、手紙をにぎりしめながら、しだいに遠くなる浜をじっと見つめていました。

太平洋の大海原に出たサン・ファン・バウティスタ号は、大きなあらしにもあいました。命がけのできごとの中、スペインの乗組員は、神にいのりながらもてきぱきと仕事を進めていきました。常長はスペインの人々の進んだ技術と、心を強く支えているキリスト教の力を感じながら、その様子を真剣なまなざしで見っていました。

月浦から出航し、およそ二か月がたったころ、バウティスタ号のまわりに海鳥がふわりとよってきました。いよいよ見知らぬ国に入ります。ここから外国との交渉が始まるのです。

使節団の一行は、アカプルコにバウティスタ号を残し、陸地を通ってメキシコ市に移動しました。メキシコ市に着いた常長は、副王に会うことができました。常長は、政宗の考えを熱心に説明し、協力してくれるようにたのみました。しかし、副王は、なかなか協力すると約束してはくれませんでした。遠く日本から命がけで海を渡ってやってきたのに、どうして協力してくれないのだろう。信じてくれないのか。ここで旅が終わってしまうのではないか。常長は、歯がゆい気持ちでいっぱいになりました。けれども、自分にこんな大役を任せてくれた政宗の顔を思い出しながら、何度も何度も宮殿に足を運び、根気強く使節の目的を説明しました。



使節団…
主君(こ)では殿様の命により、派遣された使者たち。
副王…
王の次の位の人。

常長がしんぼう強く交渉したことで、副王は、使節団がヨーロッパに行き、直接スペイン国王に会うことができるように取り計らい、さらに旅の資金も援助すると約束してくれました。常長の思いがようやく一歩前進した瞬間でした。

しかし、その後も苦勞の連続でした。常長はスペイン国王フェリーペ三世に会うまで、さらに約四十日も待たせられました。その間、常長はいらいらしてくる気持ちを押さえながら、どのように交渉すれば、国王の心を開くことができるか考えました。頭の中には、遠く日本にいる主君の顔や家族の姿、そして、これまでの旅で出会った人々がうかんでいました。あれこれと考えながら歩いていくうちに、常長は街の教会の前に立ち止まりました。常長が目にしたのは、高い天井と大理石の太い柱、ろうそくの炎の向こうにたたずむキリストの像でした。その像は、悩み苦しんでいる常長自身を包みこむような優しいまなざしで見つめているようでした。常長は心を落ち着けて、自分の信じていくべきものは何なのか、自分の使命は何なのかを考え直し、心の糸をゆっくりほいていくようにキリストの像を見つめ続けました。

長い間待たされた結果、常長はついにスペイン国王に会うことができました。国王を前にして、常長は、政宗の書状を堂々と読み上げました。さらに、次のようにつけ加えました。

「わたしは、国王様に見守られながら、キリスト教の洗礼を受けたいのです。これからもずっと、あなた方といっしょに神様を信じさせてください。」

常長は、自分もキリスト教の信者となると決心していたのでした。その後、常長はマドリードの教会で、国王フェリーペ三世の見守る中、キリスト教の洗礼を受けました。

「ドン・フェリーペ・フランシスコ・ファシクラ。これが、あなたの洗礼名です。」

聖歌隊が歌う祝いの歌が、美しいオルガンのひびきとともに常長の体にしみこんでいくようでした。また一歩、常長は、自分の思いを前進させることができました。ローマへ向かう使節団の足取りも軽く、行き先

洗礼：
キリスト教で信者
になるための儀式。



国宝 支倉常長像（仙台市博物館所蔵）

も明るくなってきました。

数か月後、使節団はいよいよローマに到着しました。高らかなラッパの音が鳴りひびく中、使節団は堂々とローマ市内を行進しました。刀を下げ、白馬にまたがった者、長刀やかからかさを手にした者が続きました。常長は鳥や草花がししゅうされた白いはおりとはかまに身を包み、馬に乗って行進をしました。その和服姿は、ローマの人々の目をうばうほどあざやかでした。常長は、月浦を出航してから二年余りの長い旅の日々を思い起こしました。

ついに常長は、市内の宮殿でローマ法王に会うことができました。常長は、

「ここまでわたしたちを、無事に導いてくださった神に感謝します。」

と言いながら、ローマ法王に深く頭を下げ、政宗から預かった手紙を差し出しました。

宮殿を出た使節団の目には、うっすらと光るものがありました。自分の思いに近いことを感じた常長も、胸にこみ上げる熱いものを感じながら、どこまでも続く青く晴れたローマの空を見渡しました。

支倉常長

支倉常長は、江戸時代初め、仙台藩主伊達政宗の命令により、「慶長遣欧使節」として太平洋と大西洋を渡りスペイン、ローマへ向かった人物である。現在、出発した石巻市には、復元船サン・ファン・パウティスタ号が展示されている。

長刀：
武士が使用していた、長い柄の先端に刃物がついている武器。

からかさ：
竹に紙をはって油をひき柄をつけたかざ。